

# 普通科高校専門コースにおける学習と進路選択

比較教育社会学コース 小 黒 恵

Students' learning and career choices in the vocational course of a general high school

Megumi OGURO

The aim of this paper is to consider the new concept of specialty in education, which transcends the dichotomy of general education versus strict specialization, by clarifying the effects and problems of its actual implementation in the vocational course of a general high school.

This research reveals that in the case example, three features of the practice — “wide and shallow specialization”, practical training, and presentations—have had various positive effects on students' learning and career choices. This finding supports the legitimacy of promoting diversification of high schools through the introduction of vocational education to general high schools.

## 目 次

1. 問題設定
  - A. 高校生の学習・進路選択と専門教育
  - B. 普通教育対「堅固な専門性」という二項対立図式
2. 普通科高校専門コースの概要
3. 調査の概要
4. 事例校の実践の特徴
  - A. 「広く浅い専門性」
  - B. 実習
  - C. 発表
5. 生徒の学習・進路選択への影響
  - A. 学習
  - B. 進路選択
6. 事例校の実践が抱える問題点
7. 普通科高校専門コース内の多様性
8. 結論

## 1. 問題設定

### A. 高校生の学習・進路選択と専門教育

本研究の目的は、普通科高校専門コースに着目し、その実践が生徒の学習と進路選択に及ぼす効果と問題点を実証的に明らかにすることで、普通教育対「堅固な専門性」という二項対立図式を越えた専門性のあり方を検討することにある。

初めに、普通科高校専門コースを研究するにあたり、なぜ学習と進路選択に着目するのかについて述べる。

まず学習に関して、現在、高校生の学習における格差が社会問題の1つとなっており、学業達成における格差については、金子（2004）など数多くの実証研究がなされている。加えて荻谷（2001）によれば、学業達成だけでなく、学習に対する誘因・意欲においても格差が存在している。よって、学習へのインセンティブが持てない層に対し、いかにしてインセンティブを提示し、学習に向かわせるかが課題であるといえる。

また、進路選択に関しては、現在、高校生の間で「夢追い」型の進路希望が形成され、リスクの高い「ASUC職業（人気（Attractive）・稀少（Scarce）・学歴不問（UnCredentialed）の職業）」人気が高まっており、その背景に「キャリア教育」の導入があることが指摘されている（荒川 2009）。「キャリア教育」では、「やりたいこと」を探し、自らの「将来の夢」をビジョンとして強く持つことが期待されている。しかし、「勤労観・職業観」や「やりたいこと」の探求を強力的に推進する反面、その実現方法や実現可能性については全く提示していない（児美川 2013a, 本田 2009）。

こうした状況下で、高校生の進路選択や進路意識の形成に対し、ただ曖昧な理念・理想によって生徒に圧力をかけるのではなく、具体的な進路選択の手掛かりや手段を提示できるような処方箋が求められている。本研究では、高校生の学習と進路に関するこうした問題に効果を持ちうる要素として、学習内容の専門性に着目する。

その理由は、まず、学力下位校である専門高校において、専門教育が生徒の学習意欲や学業適応度を高め

ることが高木（2010）や桑田（2010）によって明らかにされており、シム（2009）は生徒の学習意欲が低い日本の学力下位校において、専門教育の導入が突破口となる可能性を示唆しているからである。

進路選択についても、専門高校では「ASUC職業」を目指す生徒の割合が比較的低く、専門教育がより現実的な職業観を養成している可能性があることを荒川が指摘している。

このように、普通教育至上主義がとられ、早期の進路決定を危険視して専門教育を軽視してきた日本（田中 2013）において、近年では専門教育の意義を見直そうとする実証研究が蓄積されはじめている。

## B. 普通教育対「堅固な専門性」という二項対立図式

しかしながら、既存の研究では、専門高校などで身につけられる、いわば「堅固な専門性」の効果ばかりが主に取り上げられてきたように思われる。例えば、工業高校生の能力アイデンティティ確立に関する片山（2010）の研究では、教師による「ものづくり」をキーワードとした普通教育との強い対比・分離によって工業高校の専門性が構築されていることが指摘されている。

こうした普通教育対「堅固な専門性」の二項対立図式は、政策レベルでも顕著に立ち現われている。中央教育審議会が2011年に出した答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、「高等学校（特に普通科）におけるキャリア教育」、「専門学科における職業教育」といった項目分けがなされており、「職業教育」は、「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」と定義されている。すなわち、「職業教育」は、将来的に特定の専門職に就くことを前提として専門高校で行うもの、「キャリア教育」は普通科高校で行うもの、という二項対立的な語られ方をしているのである。

また、2013年5月に提出された教育再生実行本部の第二次提言では、「学校制度の多様化・複線化」が謳われており、「後期中等教育等の複線化」を推進するとされている。しかし、具体的な政策として挙げられているのは、専門高校の高専化・専門学校との連携接続などによる5年一貫職業教育校の200校設置という目標である。ここでも、普通教育と専門教育を分けて考える枠組みが根本にあり、「複線化」を謳いながらもその内実は専門性の高度化という方向に限定されてしまっている。

そもそも、「堅固な専門性」にはデメリットも存在する。専門高校生の学習意欲や進路選択は、入学時、生徒が専門分野にどの程度強い関心を持っているかどうかによって明確に分化しており、入学時に専門分野への関心が低い層では、専門教育の効果を享受できず学校不適応・中退者が多くなってしまうのである（児美川 2013b, 高木 2010）。

こうした状況下で、二項対立図式を越えた専門性のあり方に関する提言も出てきている。本田（2009）は、高校段階での専門教育において、専門分野の範囲やその後の進路が限定されることなく、特定の専門分野の学習を端緒として、より広い分野へと展開していくという「柔軟な専門性」概念を提唱している。さらに本田（2011）は、高校段階における分野別の「水平的多様化」を推進する必要があると述べ、普通科高校の枠組みを保ちつつも専門教育を行っている例として、普通科高校専門コースを事例に挙げている。普通科高校に専門教育を導入していくという方針に関しては、田中（2013）も、「普通教育と職業教育の統合」の重要性と統合が十分に進んでいるとはいえない現状を指摘している。しかしながら、「柔軟な専門性」や高校の「水平的多様化」といった概念は、十分に実証されているとはいえない点で課題が残る。

本稿では、普通科高校専門コースの実践がどのような効果と問題点を持ち、生徒の学習と進路選択にどのような影響を与えているのかを実証的に明らかにする。その上で、「水平的多様化」の一事例である普通科高校専門コースの実践が、「柔軟な専門性」の一つのバージョンを提供できているのかという点について検証を行い、従来の普通教育対「堅固な専門性」という二項対立図式を越えた専門性のあり方を検討する。

## 2. 普通科高校専門コースの概要

実際の調査・分析に入る前に、普通科高校専門コースの概要について述べる。

飯田（1996）によれば、普通科高校におけるコース制の起源は新制高等学校で導入されていた「科目選択制」にあり、生徒の科目選択が進路を軸として「枠づけ」られ、1955年・1969年の教育課程改訂を経て「コースの選択制」へと変質していった。

このようにして普通科高校に導入されたコース制であるが、その後の推移や経過に関する研究や、内部の実践に踏み込んだ研究は、児美川（2013b）で一事例が取り上げられるなどのごく一部の研究を除いて、管

見の限りほとんど蓄積されてこなかった。

また、行政レベルでも、普通科高校専門コースの設置状況を俯瞰できておらず、その位置付けや役割についても言及されていないという状況にある。文部科学省では、ホームページ上の「高等学校教育の改革に関する推進状況」報告書のうち「特色ある学科・コースを設置する高等学校について」という章において、各県ごとに特徴的な専門学科や専門コースの設置年度や概要などをいくつかピックアップしている。しかし、コース制を設置する普通科高校数の推移や、専門コースの種類<sup>1)</sup>の内訳などを俯瞰できる統計データはとられていない。また、ここでの扱いは「特色ある普通科高校の取り組み」の情報紹介程度にとどまり、その他の高校と比較してどのような位置付けにあり、何が期待されているのかといった点に関しては言及されていない。

このように、普通科高校専門コースはこれまでほとんど注目されてきておらず、その内部を明らかにした先行研究も十分に蓄積されてきていないのである。

### 3. 調査の概要

分析に入る前に、本稿で事例とするA校福祉コースの基本的な情報と、調査の内容について説明を行う。

A校は首都圏にある私立・共学の普通科高等学校で、「普通コース」と、設置から約10年の「福祉コース」の2コースが併設されている。福祉コースは1クラス20～30人程度で2クラスと少人数の編成となっており、男女比にあまり差はない。

偏差値は東京都入試ガイドで40程度、入試倍率は約1倍と、学力下位校である。これによりA校では、低学力に起因する生徒の自己肯定感の低さが教師間で問

題視されている。この自己肯定感の低さは、自分の意見に自信が持てないなど、学力面のみならず対人関係などの面にも及んでいる。

次に、調査の概要について説明する。本稿で主に使用するデータは、教師・生徒・卒業生を対象としたインタビュー調査によるものである。

対象者の選定にあたっては、教師については福祉科目・普通科目それぞれの担当教師が、生徒については福祉コース・普通コースそれぞれの生徒が含まれるように、また成績や性別・生活態度などに偏りが生じないように、A校に紹介を依頼した。福祉コースについては、生徒が全て独力で行う3年次の外部施設実習が福祉コースの集大成となっているため、事例校の専門教育を検討する上で重要な要素であると考え、3年生も対象に加えた。

卒業生インタビューでは、より多面的な検証を行うため、進学先で福祉を学習中の卒業生、福祉関係に就職した卒業生、福祉関係以外の進路を選択した卒業生と、3タイプの卒業生にインタビューを行った。うち5名はA校ならびにA校付属の専門学校<sup>2)</sup>から紹介を受け、3名はスノーボール式サンプリングで確保した。

その他の調査概要は、ページ下部の表1に掲載している。

また、インタビュー調査に加え、普通科目・福祉科目を織り交ぜた両コースの授業の参与観察を計6時間行い、学校関係資料の収集も行った。

### 4. 事例校の実践の特徴

分析の結果、A校福祉コースの実践には、大きく「広く浅い専門性」、実習、発表の3つの特徴があり、生徒の学習と進路選択に大きな影響を及ぼしているこ

表1 インタビュー調査の概要

教師	インタビュー対象者	福祉科目	A,B,D	
		普通科目	C(英語),E(社会)	
時間・方法		60～90分、1対1の半構造化インタビュー		
生徒	インタビュー対象者	福祉コース	3年生	F,G,H,I,J,K
			2年生	L,Q,S
		卒業生	進学先で福祉を学習中	T,U,V
			福祉関係に就職	W,X,Z
普通コース	福祉関係以外の進路を選択	Y,Z'		
時間・方法	30～45分(生徒)、60～120分(卒業生)、1対1の半構造化インタビュー(※1)			

(※1) ただし、T,Uに関しては、2人同時での実施が協力条件であったため、例外的に1対2で聞き取りを行った。

とがわかった。

より具体的にいえば、A校福祉コースにおける専門性のあり方として「広く浅い専門性」が存在し、「広く浅い専門性」がもつ効果において、福祉科目の授業実践の特徴である実習、発表という要素が大きく影響していることが明らかになった。

#### A. 「広く浅い専門性」

まず、「広く浅い専門性」について、同じ首都圏の福祉科専門高校との比較を交えて説明する。

専門高校の福祉科では、福祉といえばそれは高齢者福祉を意味しており、介護分野にほぼ特化した学習を行う。それに対してA校福祉コースでは、範囲を限定せず、介護・保育・障害者の全分野を横断的に学習することで、一分野あたりにかけられる時間数は減少するが、より広い範囲にわたって福祉科目を学ぶことができる。福祉科目の授業時間にも差があり、専門高校では週10～20時間以上、全体の約35～60%を福祉科目が占めているのに対し、A校福祉コースでは週4～6時間、全体の約14～21%と、専門高校の3分の1程度にとどまっている。この福祉科目の授業時間のうち、専門高校では2～7時間が実習に割かれ、専門スキルを磨く機会となっている。これに比してA校福祉コースでは、ベースとなる知識の座学→実習→発表による体験のふりかえりというプロセスを踏んでおり<sup>3)</sup>、特定のスキルを磨くことよりも「福祉マインド」の育成が重視されている。「福祉マインド」という概念は、福祉教科に関する教師の複数の語りに登場しており、以下のように定義されている。

15から18くらいの、こう、色んなことにこう変化していくかもしれない、そういう人たちに、あんまりこの、介護の道しかありません、保育の道しかありませんってというようなことはやりたくないよねってことで、もう自分で勉強しながら色んなことに興味がわいていけばいいし、福祉っていうのはその、全年齢に関わるし、人の色んな場面に関わる…関わっていくようなものだから。(略)色んな人たちの色んな状況に共感したりとか、その中で自分で一緒に行動してみることだとか、そういったことができるようになる、そういった、ふくらみのある気持ちを持てればいいなあって。私なんかはこう、福祉マインドっていったらそんなものかなってこう、思っている。(A先生；福祉)

こうした方針から、専門高校では介護福祉士国家試験受験資格やホームヘルパー2級などの資格取得が可

能であることが多いのに対し、A校では学校を介して取得できる資格も現時点では特でない<sup>4)</sup>。

このような「広く浅い専門性」のあり方は、生徒の入学動機と密接に関連している。

筆者は、生徒の入学動機を入学時の福祉分野に対する興味・関心によって、「専門積極型」、「マインド型」、「普通科目回避型」の3タイプに分類した。

「専門積極型」は、入学時点で福祉分野に強い興味を抱いており、将来的に介護福祉士・保育士・特別支援学級教諭などの福祉系専門職に就くことまで視野に入れているタイプで、福祉コースの生徒・卒業生17名中9名が該当する。その動機形成には、「妹が知的障害者」(Fくん；専門積極型；福祉コース3年)、「知人が老人ホームに勤務している」(Lくん；専門積極型；福祉コース2年)など身近な他者の影響がみられる。

「マインド型」は、「専門積極型」ほどの強い興味は持っていないが、「人の役に立ちたい」・「誰かに恩返しをしたい」などといった「福祉マインド」的な動機から福祉コースを選択したタイプを指し、5名が該当する。このタイプの特徴である「人の役に立ちたい」というマインドは、「他界した祖父母に恩返しできなかった分、他人に尽くしたい」(Iくん；マインド型；福祉コース3年)など関わりの深い他者からの影響や、「子どもが好きだから」(Yさん；マインド型；卒業生)などの理由から生じている。

「普通科目回避型」は、福祉分野に対する興味に先行して、苦手な普通科目をなるべく勉強したくないという意識が存在するタイプで、4名が該当する<sup>5)</sup>。専門分野の中から福祉を選択するにあたり、中学校の職業体験(Gくん；普通科目回避型；福祉コース2年)や第三者である家庭教師の勧め(Vくん；普通科目回避型；卒業生)など何らかの理由づけは存在するが、普通教科回避意識が先行している点にこのタイプの特徴がある。

このように、福祉コースを選択した動機にはいくつかのタイプが存在するが、彼らがあえて専門高校の福祉科ではなく普通科高校の福祉コースを選択した背景には、全タイプに共通する3つのニーズが存在し、「広く浅い専門性」はこれらに合致している。

第一のニーズは、本人にとって高すぎないウェイトで専門科目を学べる点である。例えばSさん(専門積極型；福祉コース2年)は、不登校時に支えてくれた祖母の介護をしたいという動機から、介護福祉士になることを志望しているが、専門高校を検討した上で自分には学習内容が専門的すぎると感じ、あえて普通科

高校の福祉コースを選択している。

第二のニーズは、専門高校と比較して普通科目の学習時間を多く確保できる点である。既に述べたように、A校福祉コースと専門高校福祉科とでは福祉科目に割かれている授業時間数に小さくない開きがあり、専門高校ではその分普通教科の時間数が削られている。福祉分野に強い興味を抱いているケースであっても、希望する専門職への適性不安や、他分野に関心が移行するかもしれないという懸念などから、リスクヘッジのために普通教科も勉強しておきたいと生徒は考えている。

そして第三のニーズは、分野を限定せずに幅広く福祉を学びたいということである。第二のニーズ同様、適性不安や関心が変化する可能性を見越し、あえて介護など特定分野に絞った学習を行う専門高校ではなく普通科高校専門コースを選択するということであり、リスクヘッジの意味合いが大きい。

これらのニーズが、「マインド型」や「普通科目回避型」のみならず福祉分野に積極的な興味を抱いている「専門積極型」の生徒にもあてはまる点は、特に注目すべきである。専門高校ではなく普通科高校専門コースを選択した理由について、特に理由はないと回答した2名と、個人的に外部の介護施設に継続して通っているため、学校は専門高校でなくてもよいからと回答したLくん（専門積極型；福祉コース2年）の3名を除けば、生徒はあえて普通科高校の福祉コースを選択することでリスク回避戦略をとっているといえるだろう。

事例校における「広く浅い専門性」は、こうした生徒の入学動機によく合致するものであり、福祉コースの生徒・卒業生17名中16名<sup>6)</sup>がA校の分野横断的な「広く浅い」専門教育に満足であると回答している。特定分野の専門職に就いた卒業生も、他分野について学習した経験が活かしていることを実感している。

保育士として勤務しているXくん（専門積極型）は、入学時から保育士を志望しており他分野にはあまり興味がなかったが、分野横断的な学習から得た知識や経験が結果的に保育業務にも役立っていると感じている。同じく保育士であるZさん（マインド型）も、特に障害者について学んだことが、保育園における障害児の対応に生かされていると語っていた。

加えて、福祉コースの生徒・卒業生17名全員が、「福祉コースで学んだこと・経験が卒業後も活きると思う/生きている」と回答しており、下のKくんの語りにもみられるような、福祉コースでの学習を通じて得られ

た世界観・視野の広がり、人との関わり、行動・共感といった「福祉マインド」がその鍵となっている。

人との繋がり方とか、そういう意味でプラスになる面は多かった。いろんな人に会っているんな考え方を知って、いろんな思いも知って、やっぱりそういうのを知ると、例えば、そういう考え方も変わるし、人との接し方も変わるし。(略) 今までは、なんか、白杖を持つてる人がいる、助けなきゃ、単純にそう思ってただけだったんだけど、いろいろ話を聞いて、やっぱり、知ってる道だったら逆に助けられないほうがその人のためになるから、とか、そういうことも考えられるようになったし。

(Kくん；専門積極型；福祉コース3年)

対して普通コースで卒業後も活用したいこととして挙げられたのは、「A校の先生のような大人になりたい」(Mさん・Nさん)、「委員会活動や部活動での人間関係や経験」(Oくん・Pくん・Rくん)など、個人の体験がベースになっており、福祉コースのように授業で学んだことが挙げられているケースは1つもなかった。福祉コースの生徒が福祉科目の授業に興味を持って取り組むことはある意味当然ではあるが、その点を差し引いても、授業での体験を通じて身についた様々な要素が多方面に広がりを見せる様相は特筆すべきである。

また、専門性の程度は高くないにせよ、進学先で福祉を学習中の卒業生3名全員が、高校からの専門知識・技術が福祉科目における「わかる」感覚や学びやすさに繋がっていると回答している。

このように、事例校では、福祉科目の授業時間数ならびに専門的スキル習得機会の少なさにも関わらず、「広く浅い専門性」のあり方が生徒に高く評価され、学んだことが進路に関係なく活用されている。福祉分野における「広く浅い専門性」を起点として、そこで培われた「福祉マインド」が鍵となり、福祉分野に限らない多方面への広がりを見せている状況から、事例校の実践は「柔軟な専門性」の1つのバージョンを提供できている事例であるといえる。

## B. 実習

「広く浅い専門性」が生徒に及ぼす効果には、A校の実践の特徴である、実習と発表という授業形態も深く関連している。

まず、実習の授業について述べる。事例校における

実習には、外部施設での実習のほか、校内外での車椅子体験・白杖体験・講演聴講が含まれており、介護・保育・障害者の全分野にわたり「広く浅く」行われている。

まず、実習という形態そのものの特徴として、座学の授業とは異なり、体験する・体を動かすという要素が挙げられ、元来座学が苦手な生徒の授業参加意欲を上昇させている。

中でも効果が大きいのは、外部施設実習である。校内のメンバーに囲まれて行う校内外実習や公演聴講とは異なり、学校外部の施設に出向き、利用者や施設職員の中で実習をやり遂げたという事実そのものや、外部の人からの「褒められ体験」(B先生)によって、低かった自己肯定感が上昇する。特に、3年次の1学期に行われる実習には福祉科目の全授業時間が費やされており、最初から最後まで一人で実習を行わなくてはならないため、時には挫折経験を克服しつつ(Gくん；普通科目回避型；福祉コース2年)、大きな達成感を得られる。

外部施設実習には、もう一つ大きな特徴がある。それは、専門職の現場に実際に入って実習を行うため、職業の現実に触れることができ、入学時の「マインド」と現実の仕事とのギャップを知る機会として機能する点である。福祉コースの授業も担当しているE先生(社会)は、「人の役に立ちたい」といったマインド的な動機と実際の専門職との隔たりを指摘した上で、学習・実習によって福祉を仕事にすることについて改めて考える機会を得られると分析している。この指摘通り、福祉コース生は福祉科目の授業での体験、特に外部施設実習で職場の現実を目の当たりにしたり、職員からリアルな話を聞いたりすることで、現実的な職業観を身につけていく。例えばGくん(普通科目回避型；福祉コース3年)は、経済的な理由で卒業後は就職する予定であるが、実習先の幼稚園で職員にしばしば聞いた話から、仕事をすることは楽しいことばかりではなく、どの職場に行っても嫌なことは絶対にあるものだ、という職業観を身につけたという。

総合的には、これらの実習が「広く浅い専門性」のもとに分野を限定せず行われることにより、多様な他人とのコミュニケーション能力が身につく。この効果は、進路が福祉関係であるかどうかに関わらず存在し、在学中に留まらず卒業後も持続するものである。

例えば、スポーツジムインストラクターとして勤務している卒業生のZさん(マインド型)は、インストラクターとして様々な顧客に対応する際、高校時代

に培った多様な人とのコミュニケーション能力が大いに活用されていると語る。

うちのジムは、普通のスポーツジムと違って、中高年の、腰やひざが痛い人とか、色んな病気持ってる人がたくさんいるので、そういう人に、どういう風にマシン指導をするのか、とか、あとは、50代・60代の方に対して、20代の私がどういう風に話をするのかっていうことで、(略) 人によって対応、言い方を変えなきゃいけない。そういうコミュニケーション能力に関しては、高校のときの実習とか、色んな人に会った経験が、すごい生きてます。福祉コースでの経験は役に立ってますね。(Zさん；マインド型；卒業生)

また、同じく卒業生で保育士のZさん(マインド型)は、保育園の業務では保護者対応が課題であることを挙げ、子どもに見られる問題を保護者に伝えたり、保護者の要求に対応したりする局面でA校で習得した多様な人とのコミュニケーションスキルが大いに活用されており、A校での体験がなければ保育園で働けていないと述べている。

### C. 発表

次に、発表について述べる。事例校の実践における発表の授業は、実習で共有した体験をふりかえって発表することで、さらに意見や感想をも共有するという意味合いを持つ。ここに福祉コース選択者であるという同質性も相まって、コース内に仲間が自分のことを理解してくれているという「安心感」(D先生；福祉)が醸成されることで、自己肯定感が上昇する・他人の意見が受容できるようになる・積極性や団結力が醸成されるといった正の効果が生まれる。福祉コース3年のIくん(マインド型)は、福祉コースで発表を通じて自己肯定感が高まった経験について、以下のように分析している。

福祉コースに入ってから、自信がついて、すごく。自分にこう、自信を持てるようになったので。みんな僕のことをわかってくれるんですよ。逆に僕もみんなのことをわかろうとするし、わかろうとするからみんなも僕のことをわかってくれる。(略) 色んな発表を重ねて、自分の考えに自信がついたり、色んな人の考えを聞いたり、それに対して自分の考えを述べて、一緒に共有しあったりっていうのがやっぱり、福祉コースだからこそできることなんじゃないかな、って。(I

くん；マインド型；福祉コース3年)

また、E先生(社会)は、普通コースと福祉コースとを比較して、学校内で行われる様々なことに対して、福祉コースは「集団として前向きに取り組める」ようになるというプラスの雰囲気があると指摘する。詳しくは後述するが、A先生(福祉)やC先生(英語)も、福祉コースについて同様の雰囲気があり、学習に効果を及ぼしていると語っている。その他、行事に対する取り組みの積極度や委員会への参加率といった点においても福祉コース生がより高いなど、17名中9名の生徒・卒業生が福祉コース生の積極性・団結力を指摘していた。

意見や感想の共有を軸にしたこれらの効果に加え、何度も発表を経験することで単純に発表・伝達スキルが向上したという語りも多く、半数以上の生徒・卒業生が、人前で堂々と発表できるようになった・自分の意見を効率的に伝えられるようになった、などのスキルの向上を実感している。発表の授業で身に着けたスキルを、学校内に留まらず、学校外でも活用しているケースも存在する。Jさん(マインド型；福祉コース3年)は、かつて感情的な物言いで人をまとめ、しばしば反感をかっていたというのが、発表の授業を通じて、相手の気持ちを考えつつ一方的にならずに自分の意思を伝えるスキルを身につけ、個人的に所属している学校外の団体でも活用しているという。

発表の授業をめぐるこうした効果は、専門高校において、「同じ専門性で結ばれた集団に属し、共同で作業に当たったりすることを通じて対人能力が養われている可能性がある」という本田(2005)による指摘が、普通科高校であるA校の福祉コースについても当てはまることを意味している。

次章以降では、こうした特徴を持つ事例校の実践が、生徒の学習・進路選択という面からみてどのような影響を及ぼしているかを検証する。

## 5. 生徒の学習・進路選択への影響

### A. 学習

まず、A校全体の特徴として、「わかる」授業・「やさしい」指導(福田2011)によって、生徒の学習意欲が上昇していることが挙げられる。

「わかる」授業とは、学習に対する苦手意識が強い生徒に合わせ、興味を持ちやすく理解しやすいよう工夫された授業を指す。例えば、配布プリントに学習漫

画のコピーを取り入れて取り付きやすくしたり(2011年6月3日；授業観察フィールドノート)、板書で赤いチョークを使用した部分は必ずテストに出る旨を予め生徒に告げて試験対策の難易度を下げたり(Vくん；普通科目回避型；卒業生)する。「やさしい指導」とは、教師が生徒との距離を近く保ち、授業中の逸脱行為も受け入れつつ授業を展開させる(2011年6月3日；授業観察フィールドノート)のような、生徒に寄り添う指導方針を指す。事例校では、学習面のみならず生活面にまで「やさしい指導」が及んでおり、提出した課題に付箋で私生活を気遣う手紙がついてきたというZさん(マインド型；卒業生)のような例もある。

こうした授業方法や指導の特徴により、普通コース生を含む生徒・卒業生22名中20名もが、学習意欲が上昇または高維持されたと回答している。

ここで福祉コース生には、福祉コースならではの学習意欲上昇効果が見られた。まず、専門科目である福祉科目の存在である。福祉科の教員であるB先生は、中学校までに学習に苦手意識を形成してきた生徒にとって、高校において新しく、かつやる事が明確にわかりやすい福祉という科目が参入することで生徒の意欲が向上すると指摘している。また、「福祉の授業が楽しいから、他(普通教科；引用者注)もやってみようかな」・「福祉やってたからこそ、普通科目も学ぶ気になった」というWさん(専門積極型&普通科目回避型；卒業生)の語りにみられるように、福祉科目への意欲が普通科目に波及しているケースもある。さらに、福祉は科目の特性として日常生活や社会との繋がりを感じやすく、学習した内容と日常生活とがリンクする喜びを通じて学習意欲が向上するという語りがあるE先生(社会)、Xくん(専門積極型；卒業生)ほか2名から得られている。

福祉という科目の存在そのものの効果に加え、4章で述べたようなコース内の積極性・団結力も効果を及ぼしている。例えば、普通コース・福祉コース双方の担任経験があるC先生(英語)によると、事例校では学期末の平均評定が一定基準を満たすと賞が授与される制度があるが、その賞を目指す姿勢に普通コースとの差が存在し、「頑張ろうという雰囲気」やハードルに「食らいついていく度合い」が違うという。

そもそもなぜ勉強するのかという学習動機についても、福祉コースと普通コースとの間に差がみられた。普通コース生の学習動機は、5名とも受験・進路や成績向上のため・保護者に言われるから、といったものであり、自主的に意義付け・設定された動機は見当た

らなかった。

対して福祉コースでは、福祉コースでの体験を通じて独自の意義付けがなされた学習動機が挙げられていた。例えばFくん（専門積極型；福祉コース3年）、Vくん（普通科目回避型；卒業生）は、多様な人とコミュニケーションを行うためには「引き出し」が必要であり、そのためには勉強することが必要であるから、という学習動機を挙げている。

また、Gくん（普通科目回避型；福祉コース3年）は、4章で述べたように、実習先の施設職員から「仕事では楽しいことばかりではなく、嫌なことも我慢しなければならない」旨の話を聞いており、「嫌なことも我慢してする練習」と捉えて学習を行っていると言っている。

## B. 進路選択

A校卒業生の進路状況をまとめた次ページの表2を見てみると、福祉コースの卒業生は、福祉分野に限定されず幅広い進路を選択している。

表2 両コースの生徒の進路（平成22年春）

	普通コース	福祉コース
四大	32%	24%
短大	8%	12%
専門学校	38%	52%(うち福祉系34%)
就職	8%	6%
その他	14%	6%

(A校学校紹介パンフレットより抜粋)

インタビュー対象者の入学動機別進路は、「専門積極型」では9名中8名、「マインド型」では5名中1名、「普通科目回避型」では4名中3名が、福祉系専門職に就いているかもしくは就く見込みである。ただし、これ以外のうち「専門積極型」1名、「マインド型」1名はA校福祉コースの教師を志望しており、専門職ではないものの福祉に関係する進路となっている。「専門積極型」は、分野の変更はあるもののやはり福祉系の進路を選択しているが、「マインド型」・「普通科目回避型」からも約半数の生徒が福祉に関係する進路を選択しており、1-Bで述べたような、専門高校ほどの入学動機による分化は見られなかった。

また、福祉コースの生徒・卒業生は、どのような進路を選択したかに関わらず、17名全員が「福祉コースでの経験によって進路選択が影響を受けた」、「福祉コースで学んだこと・経験が卒業後も活きると思う/活きている」と回答している。4-Bで述べたように、外

部施設実習で現場に触れることの効果が特に大きく、職業の現実を知り、自らの適性を再確認する機会として機能している。福祉コースでの経験により進路選択が影響を受けた例として、当初の志望を変更する・現実をふまえた上で志望を固める・進学または就職してからやりたいことを見出すなどのケースがある。

例えば介護福祉士を志望して福祉コースに入学した「専門積極型」のKくんは、外部施設実習での経験を通じ、すぐに手を出してしまう自分のかかわり方はお年寄りのプライドを傷つけてしまうものであるため、介護よりも保育に適性があると感じて志望を変更している。こうした例は、Kくんを含め専門積極型に5名、マインド型に1名存在しており、外部施設実習が志望分野の適性を判断する重要な機会であることを示している。

Sさん（専門積極型；福祉コース2年）は、介護福祉士を目標にして入学し、外部施設実習では仕事のやりがいを感じると同時に、予め抱いていたイメージとは全く異なる仕事の厳しさや待遇面などの現実的な側面を知り、親族の反対を受けながらも、現実をふまえた上で改めて介護職への志望を固めている。

また、もともと鉄道に興味があったものの、祖母の他界をきっかけに「マインド型」で入学したIくんは、卒業後は福祉とは関係のない鉄道会社に就職する予定であるが、就職後に取り組みたいこととして挙げたのは、ホームでの事故の多い白杖使用者への対応であり、福祉コースでの体験が反映されたものであった。先に挙げたKくんのケースでも、介護から保育に志望変更した上で、保育園実習で職員から聞いた話をきっかけに、子どもが言葉で表現できない内面に気づくため、心理学を学べる保育系専門学校に進学し、心理学の知識を活かした保育をしたいと考えている。

加えて、すでに福祉系専門職に就いている卒業生の語りからは、外部施設実習で現実を垣間見ているため、就職後のリアリティショックが少ないことがわかる。老人ホームに勤務するWさん（専門積極型&普通科目回避型）は、就職するまでに現場を見ていなければ介護の仕事は続かないと述べ、高校生段階で自分の適性を判断し、現実を見る機会があったことを評価している。こうしたリアリティショックの少なさは、福祉系専門職に就いている卒業生全員が同様に指摘している。



## 6. 事例校の実践が抱える問題点

ここまでA校の実践の効果について述べてきたが、A校の実践には、学習面・専門分野それぞれに関して問題点も存在している。

まず学習面について、5-Aで述べたように、A校の「わかる」授業・「やさしい」指導は生徒の学習意欲を上昇させるが、学習難易度・強制度の低さから、その効果が授業内・学校内に留まってしまい、実際の学習行動に繋がっていない。Gくん（普通科目回避型）は、A校の試験について、普通に学校に来ていれば非常に簡単であると述べており、出題箇所などがわかりやすく示される授業に積極的に参加してさえいれば試験で得点できることが伺える。普通コースを含む生徒・卒業生のうち、「試験期間以外でも自宅学習や通塾を行っている/いた」と回答したのは0名であった。Lくん（専門積極型；福祉コース2年）の「勉強時間はあんまり増えたりとかはしなかったですけど、授業時間とか授業後とかに、わからないとこがあって、それを聞くっていうのはすごい増えましたね」という語りに代表されるように、校内での学習意欲は上昇するものの、授業外での学習習慣はつかないという現象が生じているのである。

A校福祉コースでは、進学に際してほとんどの生徒が推薦入試やAO入試を利用しており、センター試験受験者は数名いるかないかという状態である。ここで推薦入試・AO入試で進学先を確保するというルートから外れてしまうと、学校内での低い学習難易度に慣れた上に授業外での学習習慣がついていないことから、一般受験で非常に不利になってしまう。卒業生のXくん（専門積極型）は、短期大学の推薦を辞退し、他大学を受験したものの不合格となり、書類選考のみで入学した専門学校を経て、結局は当初推薦を辞退した短期大学を卒業するなど、推薦の辞退をきっかけに進路で紆余曲折を経ている。

次に、専門分野における問題である。5-Aで述べたように、A校の「広く浅い専門性」は生徒の高い満足度を獲得しているが、スキルを身につける機会が少ないため、福祉分野に進んだ場合、専門科目の学習で苦勞してしまうケースがある。例えば、進学先の専門学校で介護を学んでいるVくん（普通科目回避型）は、A校で得た知識は有用であるとしながらも、高度に専門的な内容になると全くわからない授業もあると指摘する。また、保育士として勤務しているXくん（専門積極型）も、大学で本格化した保育実習についていく

ことに追われ、「今までで一番きつかった」と振り返っている。最も象徴的なのは、大学で保育系の学部に進んだものの、全く対策をしていなかったピアノ実技がネックになり、単位を取得できずに大学を中退してしまったZさん（マインド型）のケースである。

この問題の難しさは、原因となる要素が同時に正の効果をも生んでいるため、これらの要素を否定してしまうことも望ましくないという点にある。よって、学習・スキル面で希望者を対象としたプラスアルファのサポートを行う、高校選択に際して志望校の実践がもつメリットとデメリットを周知できる体制を整備する、などの対処が必要だと考える。

## 7. 普通科高校専門コース内の多様性

これまで事例校であるA校福祉コースについて述べてきたが、普通科高校専門コース内の多様性をさぐるため、首都圏の他の普通科高校専門コース1校を対象に、補足的な調査を行った。この学校では、「保育系進学コース」・「看護系進学コース」と、コースごとに分野が限定され、また進学を前提としたサポートが行われている点に特徴がある。専門科目の時間数は4、5時間とA校と同等であるが、普通科目に「キッズ英語」など専門分野に関連した内容が多く盛り込まれている。

専門的同質性による意欲の向上、ならびに専門科目のウェイトが高くないため学校不適應による中退者がほばいない点はA校と共通である。しかし、進学後に必要なピアノなどの実技スキルや普通科目の受験対策などにおいて、放課後の無料講座やチューターの駐在といった手厚いサポートが行われている点や、A校で大きな効果を持っていた外部施設実習が個人の裁量に任せられ、生徒間で意欲の乖離が起きている点ではA校とは異なる。

総じて、福祉の特定分野にある程度強い関心を抱き、進学を志す生徒のニーズに合致している学校であり、専門性のあり方や普通科目の学習などの点で、A校とは異なる生徒のニーズを満たし、異なるメリットとデメリットをもっているといえる。

## 8. 結論

本研究では、A高校福祉コースを事例に、「広く浅い専門性」を持つ専門教育が生徒の学習・進路選択に様々な正の効果をもたらし、それを示してきた。こうした

効果は、福祉コースでの経験を通じて養われた「福祉マインド」をキーワードに、生徒が福祉関連の進路に進むかどうかに関わらず、多分野への広がりを見せつつ、卒業後に至るまで活用されており、事例校の実践は「柔軟な専門性」の一つのバージョンを提供しているといえる。本田は「柔軟な専門性」の端緒となる専門性の程度を明確に定義していないが、本研究では、「広く浅い専門性」について成り立つことが示された。

事例校の専門教育は、専門高校と比較して大幅に少ない時間数の中で行われており、十分な専門スキルを身につけることは難しいが、こうした条件下にあっても様々な正の効果を持ち、また、専門高校の「堅固な専門性」とは異なる生徒のニーズを満たしている。よって、これまでの普通教育対「堅固な専門性」という二項対立を越え、普通科高校の教育に一定の専門性を導入するという方向性も含めた高校の「水平的多様化」を推進し、普通科高校専門コースを一つの選択肢としてより周知していく必要があるといえるだろう。

本研究には課題も残されている。本研究は事例研究であり、知見を一般化することには慎重になる必要があるということである。例えば、事例校の実践が生徒に及ぼす効果には、福祉という科目の特性が影響していると考えられる。また、A校が私立高校であり、福祉に親和的な建学の精神が福祉コース設置の土台を堅固に形成していたことや、付属の専門学校が存在していることなども結果に作用している可能性がある。さらに、7章の補足調査からは、普通科高校専門コースという枠の内部においても、専門性や普通科目の学習のあり方に大きな幅が存在している状況の一端が垣間見えた。普通科高校専門コースを一つの選択肢として位置付けていくためにも、今後、状況の異なる普通科高校福祉コースや、他分野の普通科高校専門コースにも調査研究の対象を広げていくことが求められる。

## 注

- ここで述べているとおり、全国的な種類・内訳についてはデータがなく概観することができないが、例えば「平成25年入試用東京都高校受験案内」を参照してみると、「福祉」・「調理」など「職業的意義」を有するコース、「特進」・「選抜」など上位大学への進学を目指すコース、「外国文化」など何らかの科目に特化したケース、「デザイン」・「体育」など芸術系・体育系その他の実技を磨くコースまで多岐にわたっている。
- A校と同一の学校法人が経営する専門学校で、介護学科と手話学科があり、専門学校でこれらの分野を学びたい生徒はほぼ全員がこの専門学校に進学する。
- ただし、3年次1学期の福祉科目の授業では、週6時間全てが外部施設実習にあてられており、この時期に関しては例外である。
- 普通科高校専門コース全てが同様というわけではなく、訪問介護員などの資格が取得できる高校も存在する。
- 卒業生1名(Wさん)のみ特殊なケースで、普通科目のみを学習する高校には行きたくないという意思がまず存在していた点では「普通科目回避型」だが、幼少時からの介護福祉士という目標を見据えて福祉コースを選択している点では「専門積極型」である。よってこのケースに関しては、例外的に「専門積極型」かつ「普通科目回避型」と分類した。
- 満足度は普通であると回答したLくん(専門積極型；福祉コース2年)は、A校で福祉分野を横断的に学習したことによって介護職から障害者関係に志望を変更しており、専門性の「広さ」の恩恵は受けているものの、実習量が少ないと感じている。

## 引用文献

- 荒川葉, 2009, 『『夢追い』型進路形成の功罪——高校改革の社会学』東信堂.
- 中央教育審議会, 2011, 「中央教育審議会答申 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm), 2013年9月27日.
- 福田志織, 2011, 「多様化を志向する高校教育改革と学業不振層教育——東京都・エンカレッジスクールを事例として」東京大学大学院教育学研究科修士学位論文.
- 本田由紀, 2005, 「多元化する『能力』と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで」NTT出版.
- , 2009, 「教育の職業的意義—若者, 学校, 社会をつなぐ」ちくま新書.
- , 2011, 「普通科高校におけるく教育の職業的意義」の在り方」『進路指導841』pp.23-30.
- 飯田浩之, 1996, 「高校教育における『選択の理念』」耳塚寛明・樋田大二郎編『多様化と個性化の潮流をさぐる——高校教育改革の比較教育社会学』pp.59-70.
- 自由民主党 教育再生実行本部, 2013, 「第二次提言」  
[https://www.jimin.jp/policy/policy\\_topics/pdf/pdf114\\_1.pdf#search=%27%E6%95%99%E8%82%B2%E5%86%8D%E7%94%9F%E5%AE%9F%E8%A1%8C%E6%9C%AC%E9%83%A8+%E7%AC%AC%E4%BA%8C%E6%AC%A1%E6%8F%90%E8%A8%80%27](https://www.jimin.jp/policy/policy_topics/pdf/pdf114_1.pdf#search=%27%E6%95%99%E8%82%B2%E5%86%8D%E7%94%9F%E5%AE%9F%E8%A1%8C%E6%9C%AC%E9%83%A8+%E7%AC%AC%E4%BA%8C%E6%AC%A1%E6%8F%90%E8%A8%80%27), 2013年9月27日.
- 金子真理子, 2004, 「学力の規定要因——家庭背景と個人の努力は、どう影響するか」荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学——調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店 pp.153-172.
- 荻谷剛彦, 2001, 「階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲差社会へ」有信堂.
- 片山悠樹, 2010, 「職業教育と能力アイデンティティの形成: 工業高校を事例として」『教育学研究』第77集 pp. 271-285.
- 児美川孝一郎, 2013, 「キャリア教育のウソ」ちくまブリマー新書.
- , 2013, 『『教育困難校』におけるキャリア支援の現状と課題』『教育社会学研究』第92集 pp.47-63.
- 桑田(小黒)恵, 2010, 「専門教育と学業適応——内発的動機づけと階層分化に着目して」Benesse教育研究開発センター『都立

- 専門高校の生徒の学習と進路に関する調査報告書』研究所報 pp.72-80.
- 文部科学省, 「高等学校教育の改革に関する推進状況 (平成24年度版)」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/11/1312873.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/11/1312873.htm), 2013年9月22日.
- シム・チュン・キャット, 2009, 「シンガポールの教育とメリトクラーシーに関する比較教育社会学的研究——選抜度の低い学校が果たす教育的・社会的機能と役割」 東洋館出版社.
- 高木稚佳, 2010, 「入学目的が勉強意欲と将来展望に与える影響——都立専門高校生を対象として」 東京大学大学院教育学研究科卒業論文.
- 田村真広・保正友子, 2008, 「高校福祉科卒業生のライフコース——持続する福祉マインドとキャリア発達」 ミネルヴァ書房.
- 田中萬年, 2013, 「『職業教育』はなぜ根づかないのか——憲法・教育法のなかの職業・労働疎外」 明石書店.

(指導教員 本田由紀教授)